

What's happening? サッカーの熱さを感じました

総合科学部2年
HOANG DUYEN THI HAI ホアンユエンティハイ [ベトナム社会主義共和国]

私は2007年8月に日本に来ました。広島にある日本語学校に通い、2009年4月に徳島大学に入学しました。

現在、総合科学部・社会創生学科に所属し、経済と情報を中心に勉強しています。

日本に来る前に、『日本といえば』と聞かれたら、まず漫画を思い浮かべました。ベトナムの本屋さんや古本屋などに行ったら、必ず、子どもたちが漫画を読んでいる姿が見られます。ドラえもん、ドラゴンボール、忍たま乱太郎、Nana等がとても人気のある漫画です。また、電気製品も日本のイメージを代表するものです。丈夫で壊れにくいということで、人気があります。

日本に来て、異文化に驚くことがたくさんあります。日本語を勉強するために、毎日「Zero」というニュースを見ることにしています。最近、自殺や殺人事件が数多くあることに驚きました。これは注意を集めるためにマスコミがあえて取り上げるのかもしれませんが、日本では、命の大事さを知らない人が増えているように感じます。

ところで、日本の夏は本当に暑いです。30℃を超えたら、みんなが暑い、暑

いと言います。私は、知り合いから「ユエンってこんな暑いけど平気だろう」と言われることがあります。今の時期、ベトナムでは毎日40℃ぐらいです。特に南部にあるホーチミン市が暑いですが、エアコンがまだ普及していない状況で、ファンしか使わないのが普通です。しかも、夏には電気製品がたくさん使われて都市の供給電力が足りないため、時間によって停電が起こります。父も家の停電時間をチェックしてから、出かけます。それを考えたら、私は日本の夏の暑さは平気ですよ、と答えます。(笑)

そして、この夏を熱くしているのはワールドカップです。6月19日、とく



ぎんトモニプラザに「日本vsオランダ」の試合を見に行きました。200人ぐらいの観客と一緒に日本を応援しました。「ニッポン、チャ、チャ、チャ」と一緒に叫びました。こんなムードを味わったのは日本に来て、初めてです。すごく感動しました。ベトナムではサッカーが一番人気のあるスポーツです。老若男女を問わず、みんなサッカーが大好きです。そして、ワールドカップシーズンがきたら、あちらこちらでブラジル、イギリス、イタリアなどのユニフォームが頻繁に見られます。近所の人たちが集まって、サッカーの試合を見るのが習慣です。1998年フランス大会、2002

年日韓大会、2006年ドイツ大会の熱い雰囲気はまだ鮮明に覚えています。ゴールしたときの叫び、自分が応援するチームの勝負の喜びと悔しさを先日の試合で再び感じました。ベトナム代表は日本代表と比べ物にならないかもしれませんが、サッカーに対する愛情は絶対に負けません。いつか、ベトナム代表もワールドカップに出場できると信じています。



徳島大学大学院薬科学教育部
創薬科学専攻 博士後期課程2年

菊地 大介

2009年10月から翌年3月にかけての6ヶ月間、米国カンザス州立大学化学科 Duy H. Hua 教授の研究室に留学する機会をいただきました。徳島大学では有機合成薬学分野で生理活性天然物の合成研究を行っていますが、新たに創薬化学について学ぶことと直に生きた英語に触れることを目的とする渡米でした。



Hua 教授と

カンザス州はアメリカ合衆国中西部に位置し、牧畜が盛んに行われるのどかな地域です。また季節の温度差が激しいため冬場は何度も大雪に見まわれ、徳島に比べて非常に寒い日が続きます。対照的にカンザスに住む人々はとても熱く、フットボールやバスケットボールのシーズンになると、学内はもちろん町中が大

学のシンボルカラーであるパープルの衣類を着た人達で溢れ返ります。バスケットボールチームが NCAA のベスト8に進出したときは、試合が終わったのが深夜にもかかわらず突然町中で歓声やクラクションが鳴り響きたいへん驚かされました。

Hua 教授の研究室では医薬品シーズとなる化合物の創製を行っており、私もこのプロジェクトの一部を担当させていただきました。アメリカの研究室は設備が日本とは多少異なるものの、実験自体は同じように行うことが出来ました。一方、試薬や溶媒の取り扱い(レギュレーション)が法律で細かく定められており、日本より安全・環境面に対して厳しい管理が行われています。また、化学科に属する研究室は毎週共同でセミナーを行っているのですが、普段私が専門とする化学よりも生物学的なテーマの論文が取り上げられることが多く、創薬化学

に関わる学生は専門とする化学に加えて生物学についても熱心に勉強している印象を受けました。

Hua 教授は留学生を盛んに受け入れており、研究室のメンバーにアメリカ人はおらず、中国やネパール・インド・南アフリカ共和国といった国からの留学生で構成されていました。彼ら留学生は日

本では修士課程の学生に相当しますが、殆どが奥さんや子供と共に生活しています。アメリカではこのような家族持ちの学生が生計を立てつつ研究できるような環境が整っており、この点で日本よりも進んでいるように思われます。そのため、彼らは同じ学生でも私たち日本の学生とは違った価値観を持っており、文化や習慣の違いだけでなく、そのような学生や研究者としての価値観の違いにも触れることが出来ました。

6ヶ月間の留学を通して創薬化学研究における知識や経験に加えて、自分の価値観や物事の捉え方を変えるような出来事に多く出会えたように思います。この経験を今後の研究生生活に生かしていきたいと考えています。

最後にこのような機会を与えてくださった Duy H. Hua 教授並びに穴戸宏造教授に深謝いたします。



大学の図書館



冬のキャンパス

